

【資料】

ペットフードのサルモネラ汚染による犬の健康被害の発生事例

田村 豊

酪農学園大学動物薬教育研究センター

今般、生活クラブ連合会（東京）が取り扱っていた犬や猫用のペットフード（トリーツ；躰を行う際に指示通りの行動ができた時に与えるご褒美のこと）にサルモネラ属菌が汚染し、犬14匹が死亡した疑いがあると報道された（2019年8月23日毎日新聞）。これまで単発の報告はあるものの、ペットフードとしては非常に大きな健康被害が発生したことから、伴侶動物獣医師の皆様へ情報を提供したい。

健康被害の概要について、生活クラブのホームページ（<https://seikatsuclub.coop/news/detail.html?NTC=1000000274>）から紹介すると、今回の製品は「犬・猫用ササミ姿干し 無塩」（販売者：（株）ノース・ワン、製造者：（株）ノースペット）で、購入した消費者に対して調査（2019年4月15日）したところ、59名の方から68匹のペットに嘔吐や下痢、血便、死亡などの症状を呈していたことが分かった。2018年以降の総供給数は47,222個となり、かなりの人気商品のようなだった。

生活クラブ連合会の調査によれば、分離されたサルモネラ属菌はO7群であると報告されている。O7群についてはヒトの食中毒事例（<http://idsc.nih.go.jp/iasr/25/287/kj2872.html>）や、病院内感染事例（<http://www.jarmam.gr.jp/jarmam/17-1/jp/04.html>）も報告されている。近年、ヒトから分離されたサルモネラ属菌の調査^[1]によれば、O7群である *Salmonella Infantis* が12%、*S. Thompson* が4.9%、*S. Bareilly* が2.1%と、しばしば分離される血清型である。また、このうち特に *S. Infantis* は、鶏から最も高頻度に分離されるサルモネラ属菌の血清型であり、今回は血清型まで公表されていないものの、トリーツを取り扱う飼主の健康被害も心配される。

我々は2016年4～12月までに岡山県と大阪府でサンプリングした犬や猫のトリーツ303検体のうち、7検体（2.3%）からヒトの食中毒の原因菌として重要視され、犬や猫が感染して嘔吐や下痢を伴った胃腸炎の原因となるサルモネラ属菌が分離されたことを報告した^[2]。分離株の血清型は、*S. Typhimurium* の単相鞭毛変異株O4:i:-が3株、Rissenが2株、Thompsonが7株だった。

このうち、O4:i:-は近年ヒトでも動物でも分離率が高まっている血清型で、*S. Typhimurium* とともにヒトに対して強い病原性を示すことが知られている。サルモネラ属菌が分離されたトリーツは、鶏、豚、牛が原材料であり、そのうちの2検体は韓国製であった。海外での同様の調査では、2～5%の検体からサルモネラ属菌が分離されたと報告されており、同等かやや低めという結果だった。一方、ドライフードを対象とした調査では、サルモネラ属菌は全く分離されなかった^[3]。したがって、半生のトリーツを犬や猫に与えることには細心の注意を払うことや、素手でトリーツに触れた場合には手指の洗浄を十分に行うなどの注意が必要である。なお、今回の原因について生活クラブ連合会で調査したところ、原因の特定には至っていないとのことであったが、今回の事例を受け、加熱温度が100℃未満のペットフードについて、毎回の製造日（製造ロット）について、微生物検査で大腸菌群とサルモネラ属菌の陰性を出荷基準に加え、検査結果確認後に出荷するように変更したとのことであった。

犬や猫に与えるペットフードについては、近年、著しい進歩を遂げ、ヒトの医療食に相当するような製品も開発され、販売量も格段に上昇している。一方で、栄養学的根拠に乏しい粗悪品も流通するようになり、2007年3月にアメリカにおいて有害物質（メラミン）が混入するペットフードで多数の犬や猫が死亡するという事故が起こっている。そこで2008年3月に「愛がん動物用飼料の安全性の確保に関する法律（ペットフード安全法）」が公布された。先に述べた我々の研究報告を受け、農林水産省はトリーツについてもペットフード安全法第5条第1項に基づき、愛玩動物用飼料の成分規格等に関する省令の別表の2の販売用愛玩動物用飼料の製造の方法の基準を遵守することを求めた（http://www.famic.go.jp/ffis/pet/tuti/30_3086.html）。しかし、残念ながら今回の事例はこの通知を守られなかったことにより発生したものと思われる。今後、生活クラブ連合会では、今回の事例を教訓としてペットフードに関する自主規制を強化

する方針を示しており、今後の成り行きに注視していきたい。

引用文献

- [1] 渡邊涼太、小川恵子、久保田晶子、森本 洋：北海道におけるヒト由来サルモネラ血清型の推移、道衛研所報 66、65-67 (2016)
- [2] Yukawa S, Uchida I, Tamura Y, Hasegawa T:

Characterization of antimicrobial resistance of *Salmonella* isolated from dog treats in Japan, *Epidemiol Infect* 147, e102, 1-6, (2019), (online), (<http://doi.org/10.1017/S0950268819000153>), (accessed 2019-08-27)

- [3] 湯川尚一郎、家門由理、木川裕菜、田中蓮華、横田桃子、大島誠之助、古川敏紀、仲 克己：日本における犬用ドライフードからのサルモネラ属菌検出状況調査、ペット栄養学会誌 21、27-31 (2018)